

巻 頭 言

夏期休暇に入り、普段とは異なる日々を過ごしてリフレッシュされていることだろう。日頃果たせなかったことを、時間をかけて実現できる心優しい生活。いわば非日常の空間に身を置く機会も多いのではないだろうか。

異質の文化に触れる旅は、心身に良い刺激を与えてくれるし、自然環境に恵まれた別荘で過ごす休日も気分転換の効果大であろう。日常生活の住宅が本宅ならば、暑さ、寒さを避けたり、余暇を楽しむ別宅が別荘だ。私自身、別荘を持ったことはないが、拘束から解き放たれ、趣味や研究に没頭できる心豊かな別荘ライフは、魅力的に違いない。

明治以降の別荘を概観すると、20年頃までには、政界の指導者、新興財閥などにより、主に社交目的の館が建てられ、園遊会など、賓客接待に用いられた。その後第一次世界大戦までには、来日した外交官、宣教師、貿易商、お雇い外国人たちがそれまでにはなかった西洋のリゾートをもたらした。例えば、ドイツ人医師 E. ベルツの進言で建てられた大正天皇のための箱根離宮や、イギリス人牧師 A. C. ショーの軽井沢に建てた簡素な別荘などがある。やがて第二次世界大戦までには、これらの西洋のリゾートが次第に普及していく。都市の住人に「避暑地」への志向が浸透し始めるのもこの頃である。別荘での暮らしは、旧来の生活様式から離れ、海水浴・日光浴など当時としては目新しかった洋風的生活様式を実験的に取り入れ、試してみる絶好の舞台となった。

限られた人々のものであった別荘も、戦後、高度経済成長期、バブル期を経ていっそう身近な存在になり、少し無理をすれば誰でも夢は叶うようになった。今日の別荘の多くは、周りの景色を広く取り込む開口部の大きなピクチャーウィンドウ、菜園やガーデニングが楽しめ戸外での軽食や読書も可能なサンデッキ、坪庭が眺められるバスルーム、そして暖炉が備わっている。都会にない心地よい光、風、緑、土のにおい、鳥の声を五感で味わえ、冬には薪の炎が心の芯まで暖める。

住宅の機能からみると別荘はシンプルだ。コンパクトだから維持管理もしやすい。プライバシー保持に対する要求は日常の住宅に比べると少ないから、空間は最大限に開放的に設計されている。これにより、居住者の特化された目的が果たしやすく、同時に誰もが好きなことに熱中でき、集いの場として空間を共有することも自在である。このような別荘のありかたを調べると、現代人が、なによりゆったりとした日々を、自然を肌で感じて暮らしたいと考えていることが明らかだ。居住空間を開放すると、人の心も自ずと開かれる。

この別荘はまた、現役時代の束縛から解放され、人生の終盤を締めくくる定年後の高齢者の定住のための住居としても、きわめてよく適応するのではないか。あるいは少なくとも、別荘という空間形式は、高齢者が新しい生活様式を生み出す原動力となる可能性を秘めているように思えてならない。

(竹田 喜美子)